

結節性動脈周囲炎



講演会と交流会終了しました。

- 1 日時 平成26年6月7日(土) 13:30~16:00
- 2 場所 サンシップとやま 501号室
- 3 対象者 患者及び家族 10名
- 4 内容
 - ◇ 交流会
 - ◇ 講演会「結節性動脈周囲炎について～診断と治療～」
講師 富山大学附属病院免疫・膠原病内科
科長(診療教授) 多喜 博文氏



結節性動脈周囲炎とは

結節性動脈周囲炎は2005年より結節性多発動脈炎と顕微鏡的多発血管炎の2疾患に分類されました。2006年の調査では、5,159例 男女比は2:3 年代は60~80歳に多い

結節性多発動脈炎 (PAN)

動脈は血管径により、大型、中型、小型・毛細血管に分類されます。PANは、中型血管を主体として、血管壁に炎症を生じる疾患です。年間の新規症例数は50人程度。発症年齢は平均55歳。男女比は3:1でやや男性に多い。

顕微鏡的多発血管炎 (MPA)

腎臓、肺、皮膚などの臓器に分布する小型血管(顕微鏡で観察できる太さの細小動・静脈や毛細血管)の血管壁に炎症をおこし、出血したり血栓を形成したりするために、臓器・組織に血流障害や壊死がおこり臓器機能が損なわれる病気です。全国の年間発生数は約1,400人

講師への質問とコメント

4年前に診断。ステロイド7.5mg服用中。今後、内臓に異常が起こることがありますか。また、ならないための生活の注意点は？

内臓に異常が起こるかは誰にもわかりません。が、今、安定していれば起こる可能性は少ないのではないかと思います。但し、ストレスなどに晒されると人間の身体はステロイドの需要量が上がります。ステロイドの需要量と治療に必要な量が丁度、同じであれば、バラ

ンスがとれているが、ストレス等によって需要量が上がった時には相対的にステロイド不足となり、内臓の病気がでることがあります。

出来るだけ風邪、睡眠不足など、身体にストレスを与える事をさげ、もしそのような状態になったら早目に受診したほうがよいでしょう。

一日の運動量はどのくらいが適切ですか。

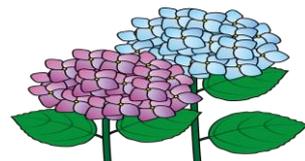
運動量は個人、個人の状態で異なります。ステロイドによる骨密度の低下がある可能性がある場合は段差のない平地でのウォーキング等がよいです。また、身体への負荷が少ない水泳や水中ウォーキングが適切です。

何故、痺れが残るのですか。

痺れとは神経の障害によって起こる症状です。

例えば正座をしていると痺れがおこる。それは血管がへし曲げられ筋肉や神経に酸素、栄養がいかなかったためにおこります。正座の痺れは正座を解くとよくなりますが、この病気の場合は血管炎の症状として出ます。

血管炎が長年続いていると血管が細くなったりし、神経に充分血液がいかない状態が続いています。神経は再生しにくい細胞であり、これによって痺れが続くと考えられます。



この病気はどのような症状がでますか。又、今後、自分で気をつけていくことはどんな点ですか。

血管は全身隈なくあるので、病気の症状は全身に出ます。（講義の中で説明あり）
今後、自分で観察できることは、皮膚の状態です。皮膚に血管炎の症状がないか、また普段と違っていると感じられる状態、例えば息切れ、動悸、尿が出にくい、血尿があったりした場合は主治医に相談することです。また、内臓の症状は検査でモニターする事が大切です。

筋力低下があり、日常生活の中で転倒や移動が辛い。筋力低下は病気の特徴ですか。

血管炎では筋肉痛はおきますが、筋力への影響は少ないです。むしろステロイド治療の影響により、筋肉がそげ落ち筋力低下が起きやすくなります。可能であれば、ステロイドの調整により、筋力低下を防げるかもしれないので、主治医と相談し適量を見つけていくことです。生活のなかでも筋力低下の予防として、室内でできる体操をして筋力アップをしていくと良いでしょう。

